第4問

清の学者・政治家阮元は、都にいたとき屋敷を借りて住んでいた。その屋敷には小さいながらも花木の生い茂る庭園があり、門外の喧噪から隔てられた別天地となっていた。以下は、阮元がこの庭園での出来事について、嘉慶十八年（一八一三）に詠じた【詩】とその【序文】である。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名・本文を省いたところがある。（配点　50）

【序文】

余旧蔵ニ董思翁(注1)自書レ詩ヲ扇ニ、有リ「名園」「蝶夢」之句。辛未(注2)秋、有リ異蝶ノ来タルニ園中ニ。識者知リテ為シ太常仙蝶ト呼ベバレ之ヲ落ツレ扇ニ。継イデ而復(ア)見ルニ之ヲ於瓜爾佳氏(注3)ノ園中ニ。A 客有呼之入匣奉帰余園者、及ベバ至リテレ園ニ啓ヒラクレ之ヲ、則チ空匣(注4)也。壬申(注5)春、蝶復見ニ於余ノ園ノ台上ニ。画者祝ヒテ曰ハク、B「苟近レ我、我当レ図レ之。」蝶落チニ其ノ袖ニ、審(イ)視ルコトヤ良久シテ、得(ウ)ニ其ノ形色ヲ、乃チ従(注6)ヒテ容トシテ鼓レ翅ヲ而去ル。園故ニ無シレ名也。於イテレ是ニ始メテ以テ思翁ノ詩及ビ蝶ノ意ヲ名ツクレ之ニ。秋半バニシテ、余奉ジテレ使ヒヲ出デレ都ニ、是ノ園モ又タ属スニ他人ニ。回ニ憶スレバ芳叢ニ、真ニ如シレ夢ノ矣。

【詩】

春城ノ花事(注7)小園多ク　幾度看テ花ヲ幾度カ　X

花ハ為ニ我ガ開キテ留レ我ヲ住トドメ　人ハ随ヒテ春ニ去リ奈レ春何　C

思翁夢ハ好ヨクシテ遺シニ書扇ヲ一　II 仙蝶図成リテ染ムニ袖羅ヲ一

他日誰タガ家カ還タ種ウエレ竹ヲ　坐シテ(注8)輿ニ可キレ許スニ子猷ノ過ギルヲ一

（阮元『揅経室集』による）

（注）

1 董思翁――明代の文人・董其昌（一五五五―一六三六）のこと。

2 辛未――清・嘉慶十六年（一八一一）。

3 瓜爾佳――満州族名家の姓。

4 空匣――空の箱。

5 壬申――清・嘉慶十七年（一八一二）。

6 従容――ゆったりと。

7 花事――春に花をめでたり、見て歩いたりすること。

8 坐レ輿可レ許ニ子猷過一――子猷は東晋・王徽之の字。竹好きの子猷は通りかかった家に良い竹があるのを見つけ、感嘆して朗詠し、輿に乗ったまま帰ろうとした。その家の主人は王子猷が立ち寄るのを待っていたので、引き留めて歓待し、意気投合したという故事を踏まえる。

問1　波線部(ア)「復」・(イ)「審」・(ウ)「得」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 28 ～ 30 。

(ア)「復」 28

① なお
② ふと
③ じっと
④ ふたたび
⑤ まだ

(イ)「審」 29

① 正しく
② 詳しく
③ 急いで
④ 謹んで
⑤ 静かに

(ウ)「得」 30

① 気がつく
② 手にする
③ 映しだす
④ 把握する
⑤ 捕獲する

問2　傍線部A「客有呼之入匣奉帰余園者」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31 。

① 客有レ呼レ之入レ匣奉レ帰ニ余園一者　客に之を呼び匣（はこ）に奉じ入るること有りて余の園に帰る者あり

② 客有ニ呼レ之入レ匣奉帰余園者一　客に之を呼び匣に入れ奉じて帰さんとする余の園の者有り

③ 客有レ呼ニ之入レ匣奉帰ニ余園一者上　客に之を匣に入れ呼び奉じて余の園に帰る者有り

④ 客有レ呼レ之入レ匣奉帰ニ余園一者上　客に之を呼びて匣に入れ奉じて余の園に帰さんとする者有り

⑤ 客有レ呼レ之入レ匣奉レ帰ニ余園者一　客に之を呼ぶこと有りて匣に入れ余の園の者に帰すを奉ず

問3 傍線部B「苟 近レ我、我 当レ図レ之」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 32 。

① どうか私に近づいてきて、私がおまえの絵を描けるようにしてほしい。
② ようやく私に近づいてきたのだから、私はおまえの絵を描くべきだろう。
③ ようやく私に近づいてきたのだが、どうしておまえを絵に描けるだろうか。
④ もし私に近づいてくれたとしても、どうしておまえを絵に描けただろうか。
⑤ もしも私に近づいてくれたならば、必ずおまえを絵に描いてやろう。

問4　空欄 X に入る漢字と【詩】に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33 。

① 「座」が入り、起承転結で構成された七言絶句。
② 「舞」が入り、形式の制約が少ない七言古詩。
③ 「歌」が入り、頷聯（がんれん）と頸聯（けいれん）がそれぞれ対句になった七言律詩。
④ 「少」が入り、第一句の「多」字と対になる七言絶句。
⑤ 「香」が入り、第一句末と偶数句末に押韻する七言律詩。

問5　傍線部C「奈春　何」の読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34 。

① はるもいかん
② はるにいづれぞ
③ はるにいくばくぞ
④ はるをなんぞせん
⑤ はるをいかんせん

問6 【詩】と【序文】に描かれた一連の出来事のなかで、二重傍線部Ⅰ「太常仙蝶」・Ⅱ「仙蝶」が現れたり、とまったりした場所はどこか。それらのうちの三箇所を、現れたりとまったりした順に挙げたものとして、最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① 春の城（まち）――袖――瓜爾佳氏の庭園
② 春の城（まち）――阮元の庭園の台――画家の家
③ 董思翁の家――扇――画家の家
④ 瓜爾佳氏の庭園――扇――袖
⑤ 扇――阮元の庭園の台――袖

問7 【詩】と【序文】から読み取れる筆者の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36 。

① 毎年花が散り季節が過ぎゆくことにはかなさを感じ、董思翁の家や瓜爾佳氏の園に現れた美しい蝶(ちょう)が扇や絵とともに他人のものとなったことをむなしく思っている。

② 扇から抜け出し庭園に現れた不思議な蝶の美しさに感動し、いずれは箱のなかにとらえて絵に描きたいと考えていたが、それもかなわぬ夢となってしまったことを残念に思っている。

③ 春の庭園の美しさを詩にできたことに満足するとともに、董思翁の夢を扇に描き、珍しい蝶の模様をあしらった服ができあがったことを喜んでいる。

④ 不思議な蝶のいる夢のように美しい庭園に住んでいたが、都を離れているあいだに人に奪われてしまい、厳しい現実と美しい夢のような世界との違いを嘆いている。

⑤ 時として庭園に現れる珍しい蝶は、捕まえようとしても捕まえられない不思議な蝶であったが、その蝶が現れた庭園で過ごしたことを懐かしく思い出している。